

## 浜田国松と中央大学

出身地 三重県伊勢市  
 生年 一八六八（慶応四）年四月二日  
 没年 一九三九（昭和十四）年九月六日

一九三九（昭和十四）年九月六日、元衆議院議長浜田国松が脳溢血で急逝した。浜田は一八六八（慶応四）年三月三重県に生まれ、三重県師範学校を経て上京、中央大学の前身である東京法学院の邦語法学科を九一（明治二十四）年に卒業している。

卒業後の彼は、弁護士として活躍しながら政治家への道を歩み、宇治山田市会議長を経て、一九〇〇年三月の第九回衆議院議員選挙に三重県郡部より出馬、みごと当選している。この時、同じ選挙区には「憲政の神様」といわれた尾崎行雄がおり、その後一時的に選挙区が分かれる時期もあったとはいえ、両者のライバル関係は浜田が亡くなるまで続き、三五年には両者とも永年在職議員として院議表彰を受けることとなる。

政治家としての浜田は、当初桂太郎系の衆議院会派である甲辰倶楽部に属していたが、すぐに政友倶楽部の流れをくむ猶興会に移り、一二年五月の総選挙には犬養毅

系の立憲国民党から出馬して当選、政党政治の確立を目指した第一次護憲運動に参加していく。

その後、一七（大正六）年から三年間衆議院副議長を務め、第二次護憲運動に際しては、やはり犬養毅系の革新倶楽部代議士として護憲三派連立内閣の成立に尽力し、革新倶楽部と立憲政友会との合同後は、立憲政友会の代議士として活躍する。

この間、三四年には彼が強く望んだという衆議院議長に就任し、三七年の第七〇議会では、広田弘毅内閣の施政方針に対する質問演説で軍部を批判し、寺内寿一陸相との間でいわゆる「腹切り問答」を応酬するなど、一貫して政党政治を擁護する活動を展開した。

このような華々しい政治活動の一方で、浜田は中央大学の評議員として母校の発展にも貢献した。彼が評議員に就任したのは、一九年五月の中央大学社員総会において評議員の定員が五〇人から八〇人に改正された際であ

るが、この改正は、社団法人中央大学が経営する専門学校「中央大学」が大学令に準拠した「中央大学」に昇格する際の前提条件として、大学の設置者である財団法人を設立するためのものであった。

長年の夢であった「大学への昇格」を実現させるために、各界の重鎮を社団法人の評議員に迎え入れた上で、財団法人中央大学を設立しようというのである。当時、立憲国民党の代議士で衆議院副議長を務めていた浜田は、まさに評議員としての資格十分であり、浜田自身もまた、すでに評議員をひきうけ、翌年四月に実現した「大学への昇格」を心から喜んだことが容易に想像できる。



浜田国松（1935年3月16日）  
 『議会制度70年史』より

ところで、評議員時代の浜田が心から喜んだと思われる出来事が、そのほか二つほどある。一つは、三五年の創立五十周年記念式典であり、もう一つは、三八年に原嘉道学長辞

任のあとをうけた林頼三郎新学長の誕生である。

このうち、後者については「大学への昇格」とともに、英吉利法律学校以来の卒業生の宿願ともいえるべき出来事であり、学長送迎式に評議員の代表として臨んだ浜田は、「送迎の辞」において原学長の尽力に謝辞を述べた上で、「林新学長は諸君御承知の通り、我々と同じく此の学校の花園に芽生えられた方で、他所の畑より中央大学の畑に移し替えられた方ではない。我が中央大学の花園に種実を蒔いて育ったところの、所謂生粋の中央大学出身者であります。（中略）単に空理空論を研究するの学校に非ずして、質実剛健の校風を以て訓化したる有為の人材を多数社会に送り出すを以て目的とする本学の学長としては、是れ以上の適格者は容易にないと存じま

す」と喜びを表現している。  
 林新学長の誕生の翌年二月、浜田は中央大学学員会の理事長に就任する。しかし、就任から約半年後、彼は七十二歳で波乱の人生を終えることになる。